

# FLUX

# 40号

平成24年 3月31日 発行

## 今井 章久 先生 ご退職記念号



通友会



今井 章久 先生 ご退職記念号



[ 撮影者 太田 郁夫 (S40卒) ]

FLUX 40号 電子通信工学科 通友会 機関紙 (発行4700部)

発行 平成24年 3月31日

編集 FLUX 編集委員会

編集委員長 竹内 真一

shin1@cc.toin.ac.jp

TEL. 045-972-5881 (内線7345)

FAX. 045-972-5972

(桐蔭横浜大学医用工学部臨床工学科内)

発行者 武蔵工業大学 通友会会長 大島 弘之

発行所 〒158-8557 東京都世田谷区玉堤1-28-1

武蔵工業大学 電子通信工学科 通友会

akiya@bme.tcu.ac.jp

印刷所 有限会社 アレックス TEL.03-3760-2355

## ご挨拶

通友会 会長

大島 弘之 (S.40)



通友会会員の皆様には益々ご活躍、ご発展の事とご推察申し上げます。

平成22年の総会で時岡会長から新しく会長をお引き受け致しました40年卒の大島でございます。「武蔵」紙上でもご挨拶致しましたが「FLUX」誌上では初めてでございますのであらためてご挨拶致します。

会長になりまして見直ししました中に予算の事があります。通信工学科が二分され卒業生が少なくなり、又通友会に入会する学生も減少している現実を踏まえると多少の基金があったとしても将来、財務は成り立たなくなる恐れがあります。これまでも毎年、基金から取り崩しをしていました。

「FLUX」の発行は毎年続けてゆきたいのですが、予算を削減する為に原則、隔年発行にしました。一方、同窓会誌「武蔵」の発行が年2回あり、各会だよりのページがありますのでこれとリンクさせる事にしました。皆様に報告やお知らせなどはこちらを使い、通友会内の特集や会員情報などは「FLUX」にしたいと思いません。

工業会との関係ですが通友会と工業会とは表裏一体と思います。通友会の役員は工業会の役員となっているのが望ましいのではと、今回工業会理事の改選に当たり理事に推薦しました。正式には6月16日の工業会総会で決定されます。メンバーは私の他に東島(39)、千葉(40)、太田(40)、増澤(41)、鈴木(41)、今井(44)、秋谷(46)、竹内(54)の各氏となります。

本号から会員各位の近況をいただく、近況連絡ハガキを同封する事にしました。ご自分だけでなく、同級、先輩、後輩の情報もいただけたらと思います。いただいた情報は次号の「FLUX」に掲載してゆきます。マンガでも写真1枚でも構いませんから気軽に出していただきたいのです。通友会会員にこんな奴もいるのか、等々通友会なりの近況を寄せて下さい。いろいろありますが一步一步進めてゆきます。皆様の益々のご活躍とご協力をお願い致します。

写真は私が本年1月25日アルゼンチン、アンデス山脈アコンカグア峰6982mに登頂した時のものです。南半球、南北米最高峰です。



## 平成24年度 総会のご案内

平成24年度の通友会総会を次のように開催しますので、会員の皆様には万障お繰り合わせの上ご出席いただきたくご案内いたします。同封の葉書で5月20日(日)までに出席のご返事をお願いします。

### 総 会

日 時：平成24年6月2日(土)  
午後2時00分～3時00分

場 所：東京都市大学 2号館 1階 21B 教室

議 題：1.平成23年度の報告と平成24年度の計画  
2.その他

### 講 演 会

時 間：午後3時10分～4時30分

演 題：『技術者から看護師へ、私の人生』

講 師：原田 清 様 (機械 S.59卒)  
日本工営(株)を経て、現在看護師

### 今井先生に感謝する会

時 間：午後5時00分～7時30分

会 場：学生食堂 2F カフェテラス (SORA)

会 費：5000円

### 目 次

1. ご挨拶 .....	1	5. 会員交流回路 .....	21
2. 平成24年度総会のご案内 .....	2	6. 平成24年度武蔵工業会定期総会のお知らせ .....	21
3. 今井章久先生ご退職記念特集 .....	3～19	7. 今井章久先生への記念品贈呈についてお願い .....	22
4. 平成22、23年度通友会・総会報告 .....	20	8. 会費納入のお願い .....	22



# 今井章久先生 ご退職記念特集

この度、今井章久先生のご功績を称えるため『今井章久先生 ご退職記念号』の発行にあたり、先生に教えをいただいた方々から思い出をいただきました。

## 今井先生の思い出



井手畑 隆政 (S.50)  
市議会議員(広島県呉市)  
兼  
僧侶(真言宗 白華寺 住職)

今井章久先生が定年退職されることをお聞きし、兄貴みたいな先生がもうそういう年齢になられたのかと驚きつつ、そういえば自分も還暦なのだと再認識する日々です。

私達が音響研究室に入ったのは昭和49年、まだ学生運動の名残があった頃です。音響研究室は、無響室や残響室などすばらしい音響実験設備があることや、また担当教員でおられた小西睦男名誉教授(故人:平成14年3月29日に逝去)の親しみやすさからも人気が高く、オーディオマニアの学生達は何とか音研に入りたくて競い合ったものです。余談ですが、当時音研では、卒論が完成したら次にスキーの卒業試験?が待っていて、研究室全員で志賀高原に合宿し、滑れるようになるまで徹底的にしごかれたのを思い出します。お陰で社会人になってからスキーができるということで交友関係が広がり、なぜあの時スキーに連れて行かれたのか深い意味があったことを考えさせられました。

憧れて入った音研は家庭的な雰囲気、時間があれば仲間と集まり、部屋に鎮座していたオープンリールのテープレコーダで音楽を聴いたり、オーディオ談義をしたりしながら楽しい研究室生活を過ごしました。それに音研には、先生のアシスタントをされていた大変美しい女性がおられて、男子学生ばかりの工業大学の中でオアシスみたいな場所だったことを思い出します。

卒業後の話になりますが、今井先生からの年賀状に「恵子」というお名前が並んで書かれているのを拝見して、あの美しい方が今井先生の奥様になられたのだと知り、同期のみんなと大変羨ましく思った次第です。その頃、今井先生は、確か助手として音響研究室におられました。助手になられたばかりで、先生というよりは先輩という感じで指導していただいたのです。

私は、神田信男君とペアを組み、音像定位をテーマとして卒論研究することになりました。今井先生と相談し、両耳に到達する音の時間差をコントロールする実験装置を作ってみようということになり、「世に出たばかりのBBDという素子があるが、これが使えるのではないか」という今井先生のご助言をいただきました。当時は、まだポケット電卓が世に出たばかりで一万円くらいした頃です、今のようにコンピュータでシミュレーションするとか、デジタル処理するなどとは程遠く、何か実験するにも材料を集めて機器を手作りしなくてはなりません。今井先生の新しい考え方に基づいてハードウェアを設計し、神田君と秋葉原に走りました。ものづくりをする難しさと楽しさを学びながら実験装置を製作し、仮説に基づいて実験、ここでもまた今井先生に卒論のまとめ方を手取り足取り指導していただき、何とか卒論完成にこぎ着けたのです。机上の理論だけではない非常に実用的な研究をさせていただいたと感謝しています。今考えてみると、世の中がアナログからデジタルに移り変わろうとする先駆けだったので。

私は卒業して音響の道には進まず重工業のコンピュータコンピュータ部門に就職、その後IT系のベンチャー企業に転職しましたが、今井先生に教えていただいた「世の中にアンテナを張り巡らせて新しい情報をキャッチし、実際に試してみる」という姿勢を大切にしてきました。別の会

社に就職していた音研同期の神田君と、後にコスモ・エイティというIT系ベンチャー企業と一緒に仕事をする機会が訪れ、当時まだ新しい技術であったマイクロコンピュータを利用した商品開発に取り組むことになりました。神田君がハードウェアをデザインし、私がソフトを担当、そして、約900曲の讃美歌全曲をメモリーに搭載した弁当箱サイズの自動オルガン演奏機を商品化しヨーロッパまで持ち込むことができたのも、音響研究室で今井先生に教えていただいた「目的に向かってどのように取り組んだらよいか」という考え方が根底にあったものと深く感謝しております。

卒業後、今井先生とは数回しかお会いしておりませんが、その度に適切なお助言をいただきました。また、先生から毎年いただく年賀状の宛名がいつも変わらず手書きであることに感銘し、必ず添えられている手書きの温かいメッセージに、先生の温厚なご尊顔を思い起こします。

私は、還暦を機にIT業界を卒業し市政の道に転職しました。これまでの恩返しとして生まれ故郷のまちづくりをしてみたいという思いからです。これからの第二の人生、あらためて今井先生のご指導や音響研究室の日々を思い起こしながら、常に前に向かってチャレンジを続けていきたいと思えます。

今井先生、長い間お疲れ様でした。そして、先生と奥様の第二の人生がこれからどう展開していくのか、また年賀状で拝見できるのを楽しみにしております。

ますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

ありがとうございました。

## 今井先生御退任寄稿文

上田 武彦 (H.13 院15)  
ソニー株式会社勤務

今井先生が定年にて退任されるとお聞きし、「もうそんなお歳でいらしたのか」と思ったのが正直なところです。

社会人になってからも音響研の先輩、後輩と共に時折お会いする機会があり、その度に私が卒業した頃と何ら変わらぬ飄々としたお姿を拝見し、定年間近という年齢を全く感じていませんでした。改めてこれまでのご指導に感謝するととも

に、長い間お疲れ様でしたと、僭越ながらお世話になった学生を代表して申し上げる次第です。



ところで、私がどうしてこの原稿を依頼されたのかを考えてみますと、研究室に配属された時期が非常に特徴的だったのではないかと一言が言えます。というのも、私が配属されたときの"音響情報研究室"は、音響グループと計測グループという全く異なる二グループで構成され、音響グループで言えば担当教員は今井先生お一人でした。後にも先にもこういう体制の音響研は無かったのではないかと思います。つまり、私が研究室で過ごした三年間は、最も今井先生らしい研究室であったのではないのでしょうか。

では、今井先生らしい研究室とはどういうところか。一言で言うと"自由"であったと思います。学生が自ら考え研究を進め、ときには失敗することもよしとする風土がありました。私が研究室に配属され初めてのゼミ発表のとき、初回はたいてい先行研究のまとめを発表していたのですが、私は先輩の力もお借りして実験を行うところから始めました。まだ理論の理解が不十分な中、無謀にも行った実験です。もちろん、その結果は散々で発表では先輩方の質問攻めに遭い、やはり普通に先行研究をまとめるべきだったかなという考えがよぎりました。しかし、そのような中で、今井先生は実験をした姿勢を評価してくださったのを覚えています。気になることは、調べてみる。たとえ思ったような成果を得られなかったとしても、それは無駄ではない。私は今井先生のご指導の中で、自分の好奇心や疑問、新しい考えを行動の原動力に出来るようになったのだと思います。これは今でも私にとって最大の武器であると言えます。ちなみに、その後大学院に進んだ私は、学部



生の後輩に同じ経験をさせました。初回の発表で実験 失敗（ここは私の力不足です。ごめんなさい。） 質問攻めのパターンです。そして、やはり最後に先生が他の学生に仰ったことをよく覚えています。「結果はもう少しだったかもしれないけど、彼は自分で実験をしたんだよ。凄いと思わないかい？」この経験がその後輩にとってどういうものであったかは分かりませんが、その後の一年間、彼と共に研究を行い、充実した時を過ごせたのは紛れもない事実です。

このように研究室では大変教育的な指導をして頂き、学生からもとても慕われていた今井先生ですが、研究室以外ではどうだったでしょうか？ 恐らく、多くの学生にとって"曲者"な先生だったのではないのでしょうか？

今井先生がご担当されていた科目は音響工学を始め、デジタル信号処理、電気回路、プログラミング言語など、通信工学科の学生にとって、難しく、また重要なものばかりでした。これらの科目を先生は、時に興味深い雑学や、重箱の隅的などうでも良い（失礼！）話などを織り交ぜながら、笑顔で軽快に教えていらっしゃいました。しかしながら、その笑顔とは裏腹に、やはり難しい科目であり、期末試験は過去の問題を参考に勉強する学生が多かったと思います。ここに落とし穴があるのです。なぜなら、過去の問題を知っているからこそついひっかかってしまう仕掛けが仕込まれている場合があるからです。本当に理解して解答して欲しいと言う先生の願いゆえに捻りの利いた問題なのですが、そういう問題を出すことすらも講義中に面白おかしくお話しされていて、これらの要素、"話の面白さ"、"科目の難しさ"、"捻りの利いた人" が研究室の外での今井先生だったように思います。

最後にもう一つ、私が卒業してからの今井先生らしいエピソードがあります。私の後輩たちも我々の世代と同じように今井先生を慕っており、たまたま私が会社からOB訪問で研究室を訪れたときに、彼らは卒業のときに先生に贈るプレゼントを相談していました。全く知らない学生達でしたが、恐らく上下の仲が良い、相変わらずな研究室だったのでしょう。私にも「どんなのが良いと思いますか？」と尋ねてくれました。そこで私は無責任にも「先生の家に勝手に記念樹でも植えちゃえば？」と言ったところ、彼らは本当にやってしまったのです。後でその時の状況を聞いたのです

が、今井先生の奥様のご協力のもと、今井先生にはバレないようにご自宅の庭に記念樹を植え、そしてそのことを今井先生に告げたそうです。知らぬ間に植えてあった記念樹をご覧になり、先生は最初「崩れ落ち」、しかし大変喜んでいらしたとのこと。今思えばこの辺りの冗談混じりを理解して頂けるといふ信頼感が、音響研での今井先生と学生の関係の一番素晴らしいところだったかもしれません。

## 今井先生の思い出



江口 真澄 (S.59)

今井先生、定年を迎えられ、おめでとうございます。

“約40年” 武蔵工業大学（現：東京都市大学）で教職を続けた事は、先生方の中でも記録を作ったのではないのでしょうか？

私が入学した頃は女子学生が少なく、学年で電子通信2名・経営2名・建築7名しかいませんでした。その頃の先生は、学生の面倒を根気よく見ながらも、通信科の雑務をまかされていていつも忙しそうにしていた印象があります。先生の部屋に行くと、提出されたレポートの山の間から出て来る先生を今でも懐かしく思い出されます。

新入生が先輩達と東芝のショールームと高尾山登山に行くオリエンテーションがあり、その時参加されていた先生の印象があまりにも強かったのか、同好会・音響研究会の勧誘を受けた時すぐに入部してしまいました。研究室も音響研究室を選んでいました。（現在、音響研究会はなくなってしまい、音響研究室もどうなるのか心配ですが...）

昨年の学園祭に音響研究会の有志で集まり、新しくなった残響室・無響室を見学させていただきました。私が学生の時は図書館の下に有り、なんとなく隔離されているようで不便でしたが、今は3号館の研究室に直結している地下に有り、便利に

なったなあと思いにふけながら階段で下に降りていくと昔と変わらない独特のにおいがあり、残響板・お琴・ダミーヘッド...当時あった器材もまだ残っていて、当時に戻ったような感覚に成りました。当時から比べるとコンピュータの性能は飛躍的によくなり、レコードはCDに代わり、カセットテープのウォークマンからメモリー媒体のデジタル機器に代わり、その変化の中を過ごしてきたのだと感じるとともに、この大学で学んだ基礎が有ったからこそ今の自分が有るのだと思いました。

先生は、実験やレポート等のやりとりの時、疑問詞で話かけ、目は笑いを含んでこちらを見ていました。現象を見極め、どう分析してそれをどうするか・どうしたいかということまで考える事を学ばせて頂きました。（レポートの再提出にはほとんど参りましたが、今から思えばもっと厳しくても良かったかな・・・？と思えるほど社会に出て役に立ちました。）

先生の印象は、いろいろありますが、一番先生らしいと思うのは、人が集まるイベントで先生を捜すときは入口付近か壁付近を見ると捜せることです。昨年のホームカミングディ（学園祭時開催）でもそうでしたね（笑）

これから今までより自分の時間がありますね、何を始めるかは聞いていませんが、これからも連



絡しますのご指導のほどよろしく申し上げます。

思いでの写真を搜してみました。卒業式で女子学生に囲まれ(笑)ている写真、奥様が写っている写真です。

奥様の写っている写真は貴重かな？と思って（仲人の今井先生夫妻と音響研究室で知り合った主人と）

## 30年を経た「私にとっての今井先生」とその後の影響

大江 良二 (S.58)

マツダ株式会社 購買本部・副本部長

私の入学の目的は、一にも二にも「東京で音楽」をすること！「東京でプロのベース奏者なろう！」と夢を抱き、しかし国語が苦手...故にしかたなく理工系で受験。友人の富田功や岩淵正憲が行くからというだけの理由で、小西先生と今井先生がおられた「音響研究室」に入室。

あれっ？全く本気で勉強していなかった私に対して投稿要請！何故？これはイジメ？投稿しなければ「あなたの卒業証書は取り消します！」なんて怯えつつも、ご指名素直にありがとうございます！とにかく卒業させて頂いたことへの感謝の意を込めて、二つのポイントで「私にとっての今井先生」をお伝えします。

その1：今井先生の「世界一シンプルなフィードバック (f/b)」

当時、はたして何のレポートを書いていたのか、実はさっぱり覚えていない。本当に学校に行った価値があったのか？しかし、一つだけ記憶に残っていることがある。私の超揮発性メモリーの中に、まさにフォトグラフィックメモリーの如く残っているのが、返却されたレポートの中の「今井先生の赤い字」。

『で？』『？』という今井先生のメモ。多くても『それで？』・・・これが最大級。このようなf/bをもらった劣等生仲間（富田）と二人で「こりゃあ～どうすりゃあ～ええんじやろうかのお～？（これはどうすれば良いのか？ in 標準語）」と悩む。おそらく優等生諸君はこのf/bの後で今井先生と崇高な技術論議をしたに違いない。しかし、私にはそのような記憶は皆無。とにかく、私にはこの短いf/bだけがまるで写真のように蘇ってきます。そして、この原稿を書きながらふと気付



く。今井先生のこの手法を普通にマネをしている私！ガーン！あるうことか！30年を経て新たな発見！これはマネだったのか？・・・とにかく『それで？』と言うと、そのリアクションに困る人は少なくない。

今思うに、今井先生はこっそりとサド的な楽しみを味わっておられたのか？と、つまらん想像もしながら、「教育者として科学」という大きな軸があったんだな～って感じ入っています。「こうしなさい！」って言うのではなく、『で？』『？』『それで？』と言いながら、学生に「何がキーメッセージなの？」と気付かせてあげようという、今で言う「コーチング手法」の先駆けだったように思えてなりません。

#### その2：驚愕の「主観 vs 客観」対決

学園祭で私達が学校の中庭に作られたライブステージに立っていた時のこと。演奏中、ステージの上から白衣を着た今井先生が見えていました。手に何かを持たれていました。唐突ですが、学業はでたらめの私ですが今井先生の事は何故か好きでした。演奏が終わってステージから降りると、今井先生が私達に駆け寄ってこられました。「良い演奏だったよ！」と声をかけてくれるものと期待していました。すると今井先生は満面の笑顔で、「大江君達は dB だったよ！大きな音だね～！」と言いながら、手元の『騒音計』を見せてくれました。あれっ！それだけ？そしてさっさと研究室に戻っていかれました。



この瞬間、私の頭に大きな衝撃が走ったのです。その後の人生を大きく左右する瞬間でした！それまでの私の価値感、「音楽が世界で最高のもの！それ以外はたいして価値が無いもの！」。しかし、そんな「私の大切な音楽」に対し、今井先生の評価軸は、『音圧』でありその単位は『dB』。なんという客観性！ひどい！私の精神はズバズバになり、ただ呆然と佇むだけでした。これだけインパクトのある教育者は世界中に存在するのであるか？研究室の棚から騒音計を持ち出すという手間だけで、最大級の勘違い野郎を一瞬一撃でコーチング！これはまさに科学！

先生の教えは、その後揮発するどころか、30年たった私の頭の中で、DNAの如く生き続けています。そして私自身を変え続けています。

ありがとう！あの頃の今井先生！あの頃今の私より若かった今井先生の教えは、多くの学生の心の中に宿り、それぞれの人生に影響を与え続けています。本当に良い先生に出会えました。

劣等生を代表して感謝の意をお伝えしながら、「ハッピーリタイヤメント！」・・・『で？』

## 89年(平成元年)卒の音響研究室での思い出



### 大平 彰哉 (H.1)

株式会社LIXIL  
住設・建材カンパニー  
設備商品開発部

何とか卒業して(本当にしているのか？)自分の年齢の2分の1の月日(約22年)が経過した。卒業後は地元近隣県に戻った事もあり、一度も学び舎を見ていない薄情な学生で学校とは疎遠にはなっていますが、今井先生との出会いは忘れられない思い出です。今回寄稿の機会を与えていただいたのは、恐らくですが、私の就職先が電子通信の分野とは異なる変わり種という事からだと推察しますが、先生のイタズラ心から来たものかもしれません。

さて懐かしい記憶を辿ると研究室に入るまでに今井先生から直接講義をうけた事はなかったように思いますが、その存在は2年生から組込まれる実験レポートへの添削コメントで知る事になったと思います。その出会い！は強烈で経験のないものでした。特に考察について書かれるコメントが「そうなんだ！」、「ふ～ん」、「本当？」など端的な言葉なのですが私自身には『考えが浅いな～』、『自身の言葉を述べているのか(ただの模倣ではないのか)？』とされているように感じました(私のレポートだけかもしれませんが)。また忙しい中、学生の稚拙なレポートにき

ちんと目を通していただいているのだとも感じました。そして4年生になる時に、その感触と成績が悪い(私の場合)事と人気が決して高くないという噂の音研を選び入室する事に決めました。

私が属した時の音響研究室は、小西先生(故人)、今井先生、前野先生、管野さん(故人)、大学院生2名(田代さん、寺田さん)と4年生は23名で構成されていましたが、85年生まれから最大年生までの各世代が散りばめられた個性豊かなものでした。研究室には厳格なルールはなく、研究の取り組み方についても学生の自主性に任されていたように記憶しています。ただ一つ『研究室内のGパン着用禁止』を除いては(違反した際の罰金は100円/回)。この服装ルールは小西先生が制定されたものと聞いていますが『お前ら、(卒業しても)会社にその格好で行くのか？』という言葉(気迫)に押し込まれ真面目に守っていたように思います。その後も今井先生がその慣習を継続していらっやったかは不明ですが、研究室は社会に出るための試働期間でもあるという事を伝えるためのイベントだったのかと後に感じるものでした。ただ卒業後、私自身はその問題の服装でも通勤可能な会社のため、禁止を破り続けている毎日です(ただ会社内は制服ですが・・・)。

私たちの卒業年は年号が昭和から平成に変わった節目の年で、俗にいう『バブル』が継続していた年で、尾山台商店街の通りがアスファルトから石畳風になったりと、世の中も異様な活気に溢れていました。このため就職先探しも今のような厳冬期とは違い5月には研究室の学生のほとんどが就職先を決めて、より研究に没頭できる環境でしたが、私自身はほとんど研究室(学校)に行かない墮落した生活を送る学生でした(相方の清水くんには大変迷惑をかけていたと思います)。学校に来ていない事を先生はご存知だったと思いますが、研究で多忙であったという事もあってか、特にその事で叱りつけるというのではなく温かく見守っていただいていたのだと感じています。

ところで、学校に行かないで何をしていたかというと、尾山台駅前の魚屋「魚辰(うおたつ)」で売り子のバイトをし、技術系としては接する機



会の少ない販売という業態を経験する事ができました。会社で営業・販売には就いていませんが、この経験で物を売るという大変さを肌で感じられると共に、技術だけでは商品化ができないという事、店(会社)における信用の大切さも学べ、自身の仕事への取組姿勢の基盤になっています。先生の期待とは違う副産物なのかもしれませんが、自分なりの考え方が持てる機会を得たこともまた、今井先生、音響研究室との幸運な巡り合せだったんだと思っています。また実験レポートに加筆された端的な(簡単な)言葉は様々な場面で繰り返し使っており、自身の思考の一部にもなっていました。

最後に、就職先を決めた際にいただいた「焼き物屋で何を作るんだ？」という問いに対する成果物はできていません。先生から卒業できる日がくるのか・・・？ですね。今後の先生の活躍を期しております。

#### <あとがき>

余談ですが、この年の卒業記念には安比高原スキー旅行に出かけました。院生の方も含めほとんどのメンバーが参加し(残念ながら今井先生は参加いただけませんでした)よき思い出です。その際に撮影された中身には、若々しい皆の姿が残されており回顧すると懐かしい思い出です(蛇足ですがVHSなので、他の記録媒体に移さないとするそろそろ観る事ができないようになってしまいました)。

## 今井先生の退職に寄せて



### 木村 良治 (S.61)

D&M Holdings Inc.

卒論はもう25年以上前のこと、当時からの誤解に記憶違いも多いだろう。脚色のつもりは無いが、都合の良い記憶だけが残っていることは否めない。お許しいただきたい。

#### 1. 大学で事件？



夏休みの終わりごろ、クラブの夏合宿から大学に帰り着くと正門周辺が人だかり。パトカーや警察車両と思しき車であふれていた。正門の「武蔵工業大学」も「XX病院」だか「XX警察署」になっていたと思う。これ、テレビドラマ「西部警察」の撮影であった。初めて撮影に遭遇したのが、パトカーだらけの正門前で、かなり驚いたことだけは記憶している。当時の「トレンドードラマ？」の話題作、「ふぞろいの林檎たち」の撮影も電子通信科のあった3号館でも行われ、授業場面の放映で流れたのは「音響工学」の授業ではなかっただろうか(音だけ)。今となっては定かでは無いが、まだCDが世に普及する前。少なくとも自分ではビデオなど持っていない。こんな時代だ。研究室で見ていたのは、「おにゃん子クラブ」。

## 2. 音響研究室で賞状

記憶にある限り、今井先生に褒められた？ことはこの一回だろう。体育祭のバレーボールでかなりの好成績、優勝だったかも？賞状をもらって研究室に帰ると「音響研究室始まって以来だ。」と声をかけていただいた。褒められたと受け取ったが、正確には「卒論もこれぐらいの勢いでやれよ。」だったかもしれない。当時の体育祭のエントリーグループは、研究室とかクラス、クラブとか、かなりオープンだった。確かに、学生数の少なかった電子通信科の研究室が好成績を残すのは難しかっただろう。写真にも居る長身のバレー部員がいたことによるところが大きいのは確かだが。



1号館前に全員集合

## 3. ピキニダンス

結果的に先生には来ていただけなかったが、20人以上で志賀高原にスキーに出かけた。腕(脚?)自慢も多く広いゲレンデでのトレイン(連なって同じ軌跡を滑る)は楽しかった。天気にも恵まれ、壮観だったと思うのは当事者たちだけか。当然、夜は大宴会とマージャン。「音響研芸能コース」のメンバーが、ロッジ前の道を通るお嬢さんたちに、窓を開け放ちピキニダンスをご披露した。



当時の音響研究室



志賀高原ゲレンデにて



志賀高原でトレイン

## 4. 今井先生の教え

音楽、オーディオにも造詣の深い(何にでも深そうだったが)今井先生との会話から、デジタル録音を手掛ける会社の面接に出かけた。オーディオメーカーの面接でオーディオはやりたくない勝手なことをのたまう学生に、翌日内定をくださる寛大な会社で、希望通りデジタル録音機、編集機などの設計、開発で社会人をスタートした。卒論時代、毎週の輪講は英語でデジタルフィルタ。どう考えても、このおかげで英語力を誤解され、3度の海外駐在。会社も外資系に替わり、去年は、ついに開発購買部門に飛ばされて上司はアメリカ人。会議、レポートも英語。技術と調達、日本語と英語の通訳みたいになって来た。間違っても成績の良い学生では無かった自分が、今日まで食いつぶされることも無く暮らして来られたのは、鍛えていただいた技術センスとロジカルシンキングのおかげと感謝している。折に触れ、今井先生にいただいた助言が思い出される。プレゼンなどで、突っ込まれると面倒な局面では「皆様ご承知のように」の一言で、ずいぶん



志賀高原ロッジ前にて



志賀高原ピキニダンス前

効率的に事を運ばせていただいた。この一言も、今井先生の教えのひとつ!!だ。

これからの今井先生のご健康をお祈りして、筆をおきたい。お世話になりました。

## 今井先生についていきます

小泉 雅一 (H.10)

都内公立中学校教諭、現在3年生担任  
横浜ジャズ協会 常任理事  
横浜JAZZプロムナード実行委員会 企画運営委員  
港南JAZZフェスティバル実行委員会 事務局長

「今井先生についていきます」

音響研究室への配属が決まり、顔合わせ初日に私が発した第一声です。この一言がきっかけで、私は室長を任されることになりました。しかし、見事に期待を裏切り、助手どころか卒業直前まで、補講や追試でご迷惑をおかけしてしまいました。卒業式前日に今井先生が私におっしゃった一言は、今でも忘れません。「あのときは、私にもこのときがきたかと、嬉しかったよ。」お恥ずかしい限りです。

振り返れば高校3年生の頃、残響室と無響室を持つ音響研究室に入ることを夢見て、武蔵工業大学のみを受験し、自己推薦制度にあやかって、面接と論文のみで入学しました。入学してからは、毎時間講義の内容をノートに書き取ることがやっとならした。試験勉強と言えば、過去問のコピーを入手することから始まり、今思えば綱渡りの学生生活だったように思えます。

今井先生は、私のような学生でも決して見捨てることなく、理解できるまで基礎から丁寧にご教授くださいました。おそらく「この学生は、今まで何を学んできたのだ」と、呆れていらしたに違いありません。しかし、そんなことは一切感じさせず、私に「そうだったのか」と、自らの力で答えを導き出すことができた喜びを味合わせてくださいいただきました。私は、いつしか、今井先生のような教育者を志すようになりました。

大学4年生のときの就職活動では、大半の学生がメーカーへの就職を希望するなか、私は「教員」の道しか考えられませんでした。母が大学に呼び出され、私自身も何度も考え直すようにと説得されました。そんなときでも今井先生は、多くを語られず見守っていただきました。



私は現在、都内の公立中学校で技術科の教師を務めています。大学を卒業してしばらくは、非常勤講師として都内の中学校を転々とし、定職に就けない不安定な生活が6年間も続きました。当時の技術科教諭の募集人数は若干名で、何度も別の道への変更を考えました。毎年、年賀状で知る同期の活躍ぶりには、ただただ焦るばかりでした。

「諦めなければ、必ず道は拓ける」ただそれだけ信じ続け、6回目の試験でやっと東京都採用1名という狭き門を通過することができました。このことを真っ先に今井先生にご報告すると、ご自身のことのように喜んでくださいました。後にご講義の中で、私のことを話題にされ、後輩たちから拍手が湧き上がったと聞いています。改めて母校の温かさを感じました。

私にとって、教師という職業は天職だと思っています。大学入試の面接では、音響エンジニアになることが夢だと語っておきながら教育の世界に進んでしまい心苦しくもあります。しかし、時々刻々と変化する教育現場において、頼れるマニュアルもなく切磋琢磨しながら未来ある子どもたちと共に過ごす学校生活に責任感とやりがいを感じています。



現在の学校教育は、「ゆとり教育」でも「詰め込み教育」でもありません。まず教師が生徒一人一人の実態に応じて基礎・基本となる知識や技能を教え、それらを生徒たちが自ら考えて活用し、主体的に行動する能力を養う指導や助言を行っています。生徒たちの「できた」「そうだったのか」という言葉が嬉しく、その言葉を聞くために日々生徒理解や教材研究に努めていると言っても過言ではありません。一方、私には学生時代から続けていることがあります。地元横浜市内で、子どもたちが主役となるジャズ・フェスティバルの企画・運営です。教育は、学校だけで行うことで

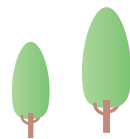
はなく、時には地域の力も必要です。私は地域住民の1人として、地元の子もたちと、音楽業界の第一線で活躍されているプロ・ミュージシャンとの橋渡し役に努めています。子どもたちの演奏技術の向上はもちろんのこと、様々な人と関わりを持たせることで、夢や希望をもって主体的に行動ができる子どもたちの育成に貢献できればと考えています。

また、ジャズと教育には、共通点があると考えています。ジャズは、コード進行というルールのもとで、個性を表現するアドリブの世界です。つまり、同じ曲であっても演奏者によって雰囲気異なります。私は、ジャズ・ミュージシャンのようにルールやマナーのもとで、個性を發揮する唯一無二の子どもたちを育てたいのです。いや、誰しもが掛け替えのない存在であることに気づかせてあげられる教師になりたいのです。

学校教育に求められている「思考力」「判断力」「表現力」の育成には、まず教師の資質が問われます。そして、学校教育においては生徒の個性を尊重し、型にはまることなく、より柔軟な指導・助言が大切であると考えています。これからも私自身が様々な経験を積み、視野の広い教師になりたいと思います。「思うだけ？」と、今井先生の声が聞こえてきそうです。週1回の卒業論文のゼミで、「思います」で言葉を締めくくると、よく笑顔で突っ込まれました。そんなユーモアのある今井先生は、私の憧れの方です。

私は、常に「子どもたちのために」を念頭に掲げ、受け売りではなく、自らも理想の教育を探求し、今井先生に味合わせていただいた「学ぶ喜び」を1人でも多くの子どもたちに伝え続け、理想の教育者を目指します。そして、いつしか大学の教壇に立ち、教師を志す学生を育てる立場になりたいと、新たな夢を抱いています。

今井先生との出会いに心から感謝しています。どうか、ご健康に留意され、未長く我々教え子たちの行く末を見守っていただき、時にはアドバイスをいただければ幸いです。



## 今井先生との始まり

高坂 徹 (S.57 院59)

株式会社 アトリー  
R&D シニアリサーチャー

オーディオファンは皆エアチェック(今の学生さんには何のことが分からないかも)に勤しみ、ソニーとフィリップスでCDの開発が始まったオーディオ全盛期に、第一希望だった電子通信工学科に入学しました。その年の学祭で通信科としての展示では、始まったばかりの音声多重・ステレオ放送用のTV受信機(先輩方の自作)に目を見張ったものです。まだまだ該当する番組数が少なく、新聞の番組表を見ながらの展示でした。オーディオ評論家は後生大事にCDを見せ、パイオニアを含めた3社でしか再生できないとうんちくを述べていました。私の学生時代は、今から見ると隔世の感となりました。

入学した年に今井先生は助教授になられ、私が受けた今井先生の初めての授業が交流理論1でした。2回目の授業で早くも顔を覚えられてしまい、「自己顕示欲が強い」と一発で私の性格を見抜かれてしまいました。授業中、特に悪いことをしていたつもりは無いんですが……。

その秋にご結婚されましたが、交流理論1の授業中に通工会の松野会長にコッソリ呼び出され、学祭用に作ったゲートを6号館の出口に置き、今井先生が出てこられるのをクラッカーでお祝いし胴上げをしました。その日の夜が先生の結婚式だったのです。お子様がお生まれになったときには、音響研究会でぬいぐるみのプレゼントをし



した。

今井先生は音響研究会の顧問もされていました。そのオーディオ好きが高じて音響研究室に入ったわけですが、似て非なる物、オーディオ音響工学ですから趣味と学問とは別でした。結婚して趣味の世界から遠ざかっていたのですが、オーディオ好きは変わっていません。近年、再びミニワッター管アンプを自作しております。これだけは一生止められそうにありません。

修士論文まで今井先生のお世話になったので、実験のレポートや論文のチェックは日常のようにして頂きました。いつも真っ赤な赤ペンだらけ。出来の悪い学生です。決まって「なぜ?」「どうして?」「だからどうした?」です。参考にする書籍や論文には「だからどうした?」の解答はあろうはずもなく、いつも四苦八苦しました。例えば通信科の実験でトランジスタの特性を測定し、「半導体の原理からこのような結果が出ました」ではダメで、その結果から何が出来るのか? どういうメリットがあるのか?

を説明しないとレポートが通りません。

「だからどうした?」  
なのです。



お陰様で、今でも何を

書くにも何をするにも、最後は

「だからどうした?」と自問自答しています。勿論、この原稿も。卒業して「だからどうした?」の重要性を痛感しましたが、そういう指導を受けてくる人達が少ないのには驚きました。今思えばありがたいことです。

今回、ご退職を機に『音響研同窓会』(主に音響研究“室”と“会”に在籍した卒業生約900名)を立ち上げました。学内で今井先生の記念講演と懇親会を3月24日に行ったのですが、そこで作った案内状も先生のチェックが入りました。手書きのレポート用紙からパソコンの電子データに変わっても、やっぱり電子的な赤ペンだらけでした。まだまだ未熟者です。

今、一つだけ残念なことがあります。恋愛は苦



手科目。結婚するのが遅く長女はまだ高校2年、末っ子は小学6年。どうやっても今井先生のご指導を受けられないことです。社会に出て、また家庭において役立つのは知識よりも物事を解決する能力です。今井先生にはこの事を徹底的にご指導頂いたと思っています。今では私にご指導頂いたことを伝える番になりました。ただ、先生の足元にも及ばないことは良く自覚しております。

学生時代、いつか今井先生が退職されるなどということは考えもしませんでした。それだけ私も年を取りました。人生から見れば学生時代は短い期間ですが、今井先生にご指導賜り本当に良かったと思っています。掛け値無しに、最も影響を受けた先生です。ありがとうございました。これからも益々研究に勤しんで下さい。



音響研究室の無響室にて記念写真

## 今井先生の思い出

甲田 裕章 (H.16 院18)



今井先生がもうご退職されるということで、月日が経つのは早いなと感じています。長い間お疲れさまでした。

・・・と書いてみたものの、先生に「お疲れさまでした」を伝えるのはなにか適していないような気がしてなりません。今井先生は確か「目上の人にお疲れさまでと言うもんじゃない」と仰っており、そのため、研究室での帰りの挨拶はいつも「さよなら」でした。「さよなら」の響きが少し懐かしく感じます。

私の先生の思い出は、入学から3年生までの頃と、4年生から修士課程修了までの研究室在籍中の思い出に分けられます。

3年生までは講義や実験が大学生活の中心ですが、この頃の思い出は「面白くて厳しい先生」につきまます。気さくで話しやすく、かつ講義は面白くて、必ずオチがつくようなお話しもしばしば。その反面、我々の世代では有名でしたが、今井先生の講義は単位を取るのが難しい。しかも選択必修の教科を担当されていることが多く、学生が皆苦労していたのを思い出します。とりわけ実験のレポートは厳しかった。先生は過去に他人が書いたレポートのコピーであることを見分けるのが異様なほどうまく、コピーしたレポートには表紙全面に「×」印が！ しかもその度合いによって二重だったり三重だったり、とてもインパクトが強い評価の表し方だったなぁと覚えています。私は幸い「×」ではありませんでしたが。

4年生以降は音響の研究室に所属し、今井先生のもとで研究に勤しみました。私の研究テーマは音響パワー測定に関するものでした。このテーマは波動に関する方程式を解く必要があり、出来の悪い私はかなり苦戦したのを覚えています。週1回開かれるゼミでは先生から鋭いご指摘やご指導をいただくので、私も同期の仲間たちもかなり緊張しながら臨んでいたのを思い出します。ですが、ただ緊張するだけでなく、和気あいあいと笑いもこぼれるゼミでした。思い返すと、このあたりが今井先生のお人柄故だなと感じます。卒業式では、先輩方と一緒にゼミのメンバー全員で先生を胴上げしました。

研究室に所属するようになってから、先生の人柄についてもより深く知りました。その中でも印

象的だったのが、何よりさすが大学の先生というか、こだわりを多くお持ちだということです。ほんの一例を挙げますと、音響工学の教科書には良く指向性の無いものを「無指向性」と書いてあるものがありますが、先生は「指向性がないじゃなすべての方向に指向性があるんだから『全指向性』が正しい！」と言って必ず訂正されていました。この辺はもう完全にこだわりです。他にも「マイクロホン」は「マイクロフォン」ではない(根拠は音響用語辞典をご覧ください)など、挙げだしたらキリがありません。

当時、このようなこだわりから「研究者魂」といったものを強く感じたのを覚えています。研究は強い意志やこだわりがあってこそ成果が出るものだという、今井先生からのメッセージのように感じました。師事した先生の影響でしょうか、今では私も研究者ではないものの、かなりこだわりを持った人間になってしまいました。

そういえば、先生はいつも白衣を身にまとっていたのですが、研究室に所属するようになってから白衣を着ない、まるで普通のおじさんのような姿(失礼ですが)を初めて拝見しました。あの白衣もこだわりのひとつだったのでしょうか!?



先生と出会い、教えを頂き研究を進めたことで、私は何よりも学ぶことの楽しさを知ることができました。私の人生の大きな財産です。とても感謝しております。

大学へ行っても、今井先生ともうお会いできないのかと思うと、とても淋しく感じます。

ご退職後はどのように過ごされるのでしょうか?

きっと何にでも興味を持たれる好奇心、探究心旺盛な先生ですから、何かを探究する日々を送られるのではないかと想像しております。

どうぞお体にお気づかいの上、穏やかな日々をお過ごしください。冒頭では、「適していないのでは」と書きましたが、あえて書かせていただきます。

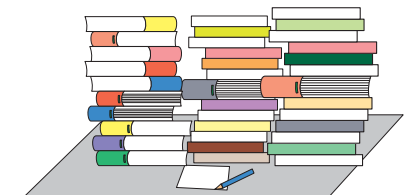
お疲れさまでした。

## 今井先生との思い出

遠山 彩乃 (H.21)

年明けに今井先生への寄稿をお願いされた時、正直なところ、どんなことを書けば良いのか分かりませんでした。そこで、職場へ向かう電車の中、今井班として過ごした日々を振り返っていたらふっと笑ってしまう記憶が蘇ってきたので、それを幾つか書いてみようと思います。

私が一番初めに思い出したことは、今井先生の部屋でした。今井先生の部屋は研究や講義の資料でいっぱい、その資料の真ん中に今井先生がいらっやいました。扉をノックするとちらりと目が合っ、一瞬変な間があった後に話し始めるという独特な感じを今も思い出することが出来ます。部屋に入る時は資料を倒さないように注意が必要で、私は一度だけ部屋の奥の方まで行ったことがあります。入口へ戻るときに少し苦労した気がします。でも不思議と、何とも言えない居心地の良さみたいなものがありました。あの部屋がなくなってしまうことをとても寂しく思います。



次に思い出したのは、今井先生のくじでした。今井先生の講義を受けていたときのこと、初回の講義だったかどうかは分かりませんが、先生の白衣のポケットから突然くじが出てきて、問題に答



える人をくじで決めると言い出したのです。少人数の講義でしたし、講義を受けている学生もほぼ今井班のメンバーだったからなのかな？と今は思いますが、当時のポケットに手を入れた瞬間のドキドキ感を思い出しました。

これからの話は講義などとまったく関係のないのですが、私の中ではとても印象に残っている少し変わった思い出なのです。それは話し方についてです。恥ずかしい話ですが、私は当時よく「昨日借りたやつ」とか「食べたやつ」とか「～なやつ」という言葉を使っていて、その言葉を発するたびに今井先生に「やつね・・・」と言われていました。これは今井先生と私を含む女子学生との間違い探しゲームのようになり、たまに気が抜けていると「～なやつ」を連発し、自分で「あっ！」と思った瞬間にはもう遅く、「やつ～？」と今井先生から笑われ、私自身も笑いながら訂正して言い直していました。

研究室で過ごした1年でだいぶその言葉を使わなくなっていったのですが、卒業後また気が抜けて「～やつ」を使ってしまった時に一人で「あっ！」と今井先生の顔を今でも思い出します。

最後になりますが、私は卒業したその年に学祭で今井先生を訪ねました。既に今井先生は子供を連れた卒業生と思われる方と楽しそうに話をされていました。話の邪魔をしては悪いと時間を置いて再度訪ね、しばらく先生と話をしていたところに「今井先生！！」とまた子供を連れたお父さんらしき卒業生が先生に会いに来ました。私はその時、今井先生には卒業後何年たっても「先生！！」と会いに来る卒業生がたくさんいるのだなあと思いました。

今井先生、長い間本当にお疲れ様でした。また、短い時間ではありましたがご指導頂きましてありがとうございました。



## 学生時代のオーディオで活力を取り戻す



平本 純也 (S.52)

アイニックス株式会社  
代表取締役

今井先生、定年退職おめでとうございます。私は、先生が武蔵工業大学に勤務されてすぐ音響研究会の活動でお世話になり、翌年の卒業研究では直接指導を頂きました。また、卒業後、採用活動で研究室に顔を出したとき学生と話す機会を作って頂き、更に、私の結婚式にも出席して頂きました。このような様々な場面でお世話になったことに、心から感謝申し上げます。

昭和50年、音響研究会の会長であった私は、他の大学のオーディオ同好会やオーディオクラブと交流し、学生オーディオ連合を組織しました。早稲田、慶応、法政、中央、立教、東海、武蔵工の6大学でスタートし、スピーカの測定やパワーFET直流アンプの共同開発などを行いました。また、新宿サンスイシヨールームを借りてアンプの定期試聴会を行い、また、積極的に合コンも行いました。これらの活動は、私達学生にとって素晴らしい思い出になりましたが、度々、研究室に相談に伺いご迷惑をお掛けしたと思います。気さくなお人柄に加え年齢も近いことから、兄貴のように接してしまいましたが、何時も機嫌よく親身に相談に乗って下さいました。

卒業研究は、「回転拡散板による音響パワーの測定」をテーマに東芝テックに就職された青木康君と担当しました。無響音室は、音響研究会でのスピーカ測定により良く知っていましたが、隣の残響音室は全く知りませんでした。しかし、本研究により音場測定のための残響音室を知ることができ、オーディオなどの電気音響とは別世界の建築音響に触れることができました。

本研究では、合板で作った大きな拡散板を回転させ均一な音場を作ることがテーマでしたので、研究の多くは木工細工とモータ制御になりました

が、私としては結構楽しいものでした。また、音場測定では、一回の発音に対し残響がなくなるまで測定しますので、測定に相当の長い時間を必要とし、徹夜で測定したことを覚えています。本研究は、後輩のテーマとして引き継がれ、昭和60年に学術論文「残響室法音響出力測定における回転拡散板と移動・配列マイクロホンとの関係」になったことを知り、少しはお役に立てたかと嬉しく思いました。



無響音室の回転拡散板と私

音響研究は、録音再生、音声合成、音声認識、音声分析、立体音響など電子回路やソフトウェアによる電気音響分野が広く注目され、携帯電話に音声認識や音声合成が搭載される時代になりました。しかし、建築音響としての音場研究は地味ですが、私達が快適な生活空間を持つためには、非常に重要なテーマです。この研究に今井先生が長年取り組まれてきたことに、心から敬意を表します。

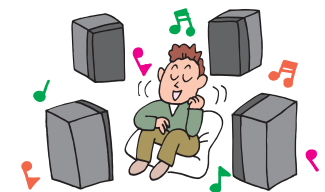
私は、音響とは全く無関係のエレクトロニクス専門商社に就職しました。当初は、営業マンとしてオーディオメーカーの設計者とオーディオ談議をすることができました。しかし、パソコン時代を迎えバーコードを担当するようになってからは、オーディオから遠ざかり、38歳で自動認識

システム開発のアイニックスを起業した後は、音楽と言えばカラオケになってしまいました。また、趣味も仕事に関係した釣りやゴルフに変わりました。そして、設立から12年後の平成18年、ベンチャーキャピタルからの支援が打ち切れ、設立メンバーが退社して



大きな壁に直面したとき、昔のオーディオが私を救ってくれました。寂しさの中で、学生時代に作成したKT66真空管アンプに火を入れたところ、30年を経てコンデンサ不良によりひどい音になっていました。そこで、コンデンサをすべて取り換えオーバーホールして復活させることができました。また、レコードが聞けるようにプリアンプのイコライザーも修理しました。半田ゴテを握っていると学生時代を思い出し、真空管の灯りに癒されて元気を取り戻しました。

現在、会社では、音声認識技術を使用した物流システムを開発しています。また、数年前に親父が脳梗塞で動けなくなったことから、早朝と休日は農業に励んでいます。休みなく忙しく働いているお蔭で、いたって健康であり充実した生活を過ごしています。当面、オーディオを楽しむことは難しそうなので、オーディオ機器は思い出と共に老後まで大切に保管して置くつもりです。今井先生と共に過ごした学生時代の素晴らしい思い出は、私にとって大切な宝です。





## 今井先生の思い出



深沢 一夫 (S.53)

株式会社 東芝  
社会インフラシステム社  
ソリューション・  
自動化機器事業部 技監

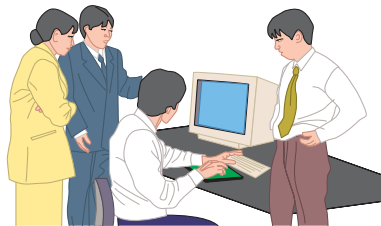
今井先生、御定年おめでとうございます。長い間ありがとうございました。

この原稿依頼があって振り返ると、早33年が過ぎ、我々も定年を気にする年代になっていました。今更ながら卒業後からの時間の長さには驚くのですが、自分自身としては逆に一瞬に思えて実感がありません。きっと今井先生ご自身もイメージが湧かれないのではないかと思います。

我々の年代では、今井先生はまだ講義を持っておらず卒論の指導をして頂いており、そもそも独身で、年長の学生仲間みたいでした。その今井先生の若かりし時代の研究室の情景描写をしてみます。かなり記憶が薄いのですが、昔の3棟2階に研究室があり、入るといきなり散乱した靴とスリッパが目に入ります。その正面に除湿機に繋がったビニールで覆われたホールの音響計測モデルが空間を占拠、その奥隣には無線用の実験エリア（倉庫？）がありました。通路を隔てた窓側に、右から暗室、今井先生、小西先生の順に部屋があり、江戸野さんと前野さんは今井先生と同室かと記憶しております。学生の部屋はその区画から右の扉に入って、南側にゼミ用（たむろ部屋）の長机の空間と、北側に個別の研究グループの机エリアとに分かれていました。各グループの机の前には、高い書棚を兼ねた仕切りラックがあり、個々に隔絶した空間が出来るようになっていましたが、音響関係のメンバは図書館下の実験室に入り浸りで、机上是散乱・メンバが揃うのは希という状況でした。今思うとPCも、携帯も、ゲームも無く、本来は研究に専念できるはずでした。学校のコンピュータはFACOM270で紙テープ入力、計測はアナログ中心でPCシミュレーションではなく半田ゴテと実物の時代であり、今とは隔世の感があります。こんな時代に今井先生

の部屋には、富士通の16ビットのマイコンボードL-KIT16、HPの逆ポーランド入力のミニ25関数電卓など当時の学生としては魅力的なモノがありました。当時の私には生まれたばかりのマイコンの価値はまだ判りませんでした。学生の部屋からは南・北側両方に緑が見え、さわやかな風がながれ、汚い以外は結構居心地の良い空間でした。

小西先生にはなかなか近寄りたいため、何かと今井先生の部屋には相談（遊びに）に伺っており、できの悪い我々を面倒みて頂いておりました。その当時の今井先生から厳しい言葉を聞いた記憶がありません。常にウィットと優しさのあるイメージがあり、その意味でも名実と共に我々学生の兄貴分でした。その今井先生の言葉で、一番私が記憶して活用しているのがありますので書かせて頂きます。



当時、外で聞きかじった技術ネタ（多分、視覚情報研究会で仕込んだ「ニューロコンピュータ」）を先生に質問したのですが、そのときに返ってきた言葉があっさり「判らない」でした。私の期待値はアウトラインの説明と先生の視点での意見があるものと思っていたので拍子抜けであり、あまりの意外さから少し食い下がった言い方をしたと記憶しています。その時先生は真顔で「判らないと言うには勇気がある。自分が知っている事と、判らない事を知っていることが大事。君に説明するレベルでは知っているが、私は専門ではないから判らないと言う」との言葉でした。その場は何となくそう言うものかと曖昧にしたまままで終わりました。

会社に入って自分で仕事が回せるようになった20代後半。あるとき専門外の知識や業務内容について「それについては知らないから教えて下さい

の言葉が以前より楽に言えている自分に気づき、瞬間、先生とのあの昔の場面がリフレインしたのです。自分自身に自信が付き、知識の階層化、加えて振り返りが出来るようになっていた事に気づいた時でした。それ以後もいろいろな人との関わりで同様なシチュエーションを強く感じるようになり、それから「その場のみで納得できない事」を許容するようにもなりました。人に説明するときには理解に熟成期間が必要と表現しています。先生とのその場面がその「気づきの原点」となりました。

現在のマネジメント教育では、「先輩の背中から盗む式の徒弟制度」で成長した我々と異なり、「詳細に業務内容と意義を説明し指導する事」が是になっています。しかし、ある部分経験不足等で今は理解できない事でも、成長過程で気づく余地を持つ事もやはり重要だと強く考えました。最近では自分の経験したことを紡いでいくために、新入社員研修・社内研修で「経験と振り返り、自己認知、「知らない事」に気づく」の例としてこの話を多少脚色して使わせて頂き、この10年間で1000人以上に訓話しました。先生にお話すると「そんなこと言ったか」と笑われそうですが、紙面を借りてここに初めて書いた次第です。あの夏の昼間の一瞬の場面は今更ながら感謝しています。きっと先生の周りの方も同じように、さりげないいろいろな言葉をもらった人が多いと思います。

今井先生、長い間お疲れ様でした。

ありがとうございました。



## 今井先生の思い出



松村 勳 (S.45)

卒業後 ㈱フジテレビジョン  
退社後は自営業 (Caffeacute; Dolce)

「室長！ ショウキュウ（章久）何処に行ったか知らないか？」。昭和44年3月、3年生の当時から何かと音響研究室に入り浸っていた私に故小西教授の「お前年来年度音研の室長をやれ」まさかの感で音響研究室の室長なる大任を仰せつかった時、3号館2階の故小西教授の部屋で丸顔で少し髪長い温かな感じの今井君（先生）を正式に紹介されたのが出会いのきっかけでした。

朝、故小西教授が研究室に入られてまず私に発する言葉は文頭の「・・・・」であり、当時研究室の卒論学生連中は私を含めて今井先生と同一年の学生も何人か居り、今井先生が居ない時は真に失礼ながら名前、「あきひさ」でお呼びしたことは正直言って正式な時を除いては余りなかった様でした。

当時今井先生は武蔵工大を卒業したばかりで、故小西教授から「これから色々とお手伝いしてもらおう今井君だ、分からないことは何でも聞いて下さい」との事でした。それ以来今井先生との一年間にわたる丁々発止の研究室生活が始まりました。

当時今井先生は大学院と研究室との二足の草鞋で、週二日か三日我々学生達の卒研のお手伝いやら、故小西教授の使い走り（失礼）等数々のお仕事？を熟していらっしやっただ様に記憶しております。







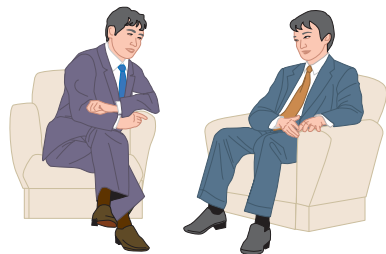
## 平成22年度、23年度 通友会・総会報告

研究室の朝のミーティングには時間の取れる限り一緒にされて、何時も学生の目線で討論に参加され、週一の研究報告の際には厳しい質問を学生に投げ掛ける事もありました。又、当時私は埼玉から通っており電車の時間の関係で早く研究室に着いても今井先生のお宅が大学から比較的近かった事からか、また、先生の生真面目な性格なのか定かでは在りませんが必ず今井先生の方が先に来られており研究室の鍵が開いていた事を記憶しています。先生としてばかりでは無く、同世代の人間として時に女の子の話、そして当時は丁度学生運動華やかかなりし時代で、校内でのデモ行進等騒然とした状況の中、学生達と議論をした時もあったような。

ある時、車で通われていた故小西教授の車、黄色のマークのナンバー「24-09」を密かに教授の秘書Y嬢と共に「黄色い小ニシのレイキウ車」だよと満面の笑みで教えて貰ったのも今井先生だった様に記憶しています。

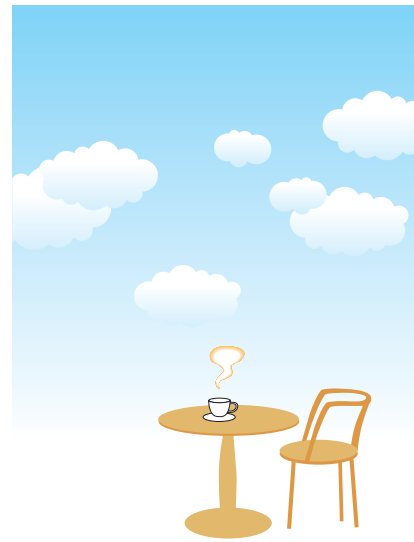
昭和45年2月、研究室生活最後の総纏め卒業研究発表会の時、私の呑気な性格から十分な下調べもせず大胆にも発表に臨んだ為か最後の質疑応答の際に厳しい事で評判の某I教授の質問にタジタジに成っている私と同僚H君に追加の質問をして密かにヒントを下さったのが今井先生であった様に思います。そのお蔭が無事合格の印を頂け、すっきりした思いで音響研究室恒例のスキー旅行に出掛けられた事は今でも思い出します。

今井先生とは現在も年賀状のやり取りは元より、私が35年勤めた放送局を早期退社して、軽井沢で始めたカフェに足を運んで下さった折には、大学の現状、学生気質の変遷など嘆き、新しい大学の将来像や今後学生達をどう指導して行くか等、帰る時間を忘れて話が弾みました。



残念ながら私は直接今井先生の講義を受けた事はありません。私が今井先生としてでは無く、一人の武蔵工大の先輩としてお付き合い頂き又、助言を頂いた一年間「ショウキウ」君の、目を丸くしてユーモアを挿み、時には厳しく、物事に対して徹底的に突っ込んでくる探求精神旺盛な白い実験着姿の今井先生の講義を受ける事がなかったのは私にとって残念でたまりません。

卒業して40年以上過ぎ、細くなった記憶の糸を何とか切れない様に手繰り寄せてみましたが、私の記憶違いの部分もあるかも知れません。其処の所は「お互い年を取りましたね」とご容赦の程を。



### 1. 平成22年度の通友会総会について

平成22年度の通友会総会は平成22年5月15日(土)に本学内で行われました。

総会に先立ち2号館1階の21C教室で各期幹事等による幹事会が行われ、時岡前会長のご退任の挨拶と時岡前会長から大島現会長への引き継ぎが行われました。



引き続き同じ教室で総会が開催されました。審議内容は、平成21年度事業報告、収支決算報告、会計監査報告、役員および各期幹事、指名幹事の選出、続いて平成22年度事業計画案、収支決算案であり審議の後、いずれも原案通り承認または可決されました。

引き続き同じ教室で第2部の講演会となり、昭和41年度通信科卒、増澤信義先生により「大学講義四方山話」というタイトルで講演が行われました。増澤先生一流のユーモアに富んだ歴代の先生方の思い出話から始まり情報理論の真髓等をわかり易い例え話と数式の解釈でご講演いただきました。



最後に第3部として、武蔵工業会関博理事長等のご来賓をお招きして懇親会が生体医工学科の秋谷先生の司会で進められ、次年度の再会を約束して盛大の内にお開きとなりました。(竹内 S.54)

### 2. 平成23年度の通友会総会について

平成23年度の通友会総会は平成23年6月4日(土)に本学内で行われました。

総会に先立ち2号館1階の21B教室で各期幹事等による総会が開催されました。審議内容は、平成22年度事業報告、収支決算報告、会計監査報告、役員および各期幹事、指名幹事の選出、続いて平成23年度事業計画案、収支決算案であり審議の後、いずれも原案通り承認または可決されました。

引き続き同じ教室で第2部の講演会となり、昭和42年度経営工学科卒、杉内信夫氏により「水中における通信方式の一考察」というタイトルで講演が行われました。



この年は3月11日に発生した東日本大震災のため午後5時以降は大学の会場は使用不可能となったため、会場を自由が丘の武蔵工業会館に移して、懇親会が行われました。関博武蔵工業会理事長をご来賓としてお招きしました。次年度の再会を約束して盛大の内にお開きとなりました。



尚、通友会の予算・決算に関しては、武蔵工業会の「武蔵」の記事をご参照くださいますようお願いいたします。(秋谷 S.46)





## 会員交流回路

次の方々が鬼籍に入られました。  
謹んでご冥福をお祈りします (合掌)

飯島 久生 (S. 22 卒) 平成 21 年 06 月 11 日	西原 正幸 (S. 35 卒) 平成 21 年 11 月
住吉 威 (S. 22 卒) 年月日不明	久保田 泰雄 (S. 36 卒) 平成 21 年 06 月
本郷 信一 (S. 22 卒) 平成 23 年 03 月 29 日	斉藤 宏嗣 (S. 36 卒) 平成 22 年 12 月 31 日
山本 博造 (S. 22 卒) 平成 21 年 03 月 18 日	佐藤 俊哉 (S. 36 卒) 平成 21 年 05 月 13 日
雑賀 昭二 (S. 24 卒) 平成 22 年 07 月 07 日	荒川 浩一 (S. 37 卒) 平成 23 年 01 月
山崎 昭一 (S. 30 卒) 平成 21 年	小笠原 定男 (S. 37 卒) 年月日不明
土屋 幸禧 (S. 31 卒) 平成 22 年 03 月	木本 茂夫 (S. 37 卒) 平成 22 年 09 月 17 日
田代 博史 (S. 32 卒) 平成 22 年 05 月 18 日	小口 雄三 (S. 38 卒) 平成 22 年 02 月 14 日
小岩井 義弘 (S. 33 卒) 平成 21 年 06 月	溝口 真人 (S. 38 卒) 平成 20 年 06 月
佐藤 修二 (S. 33 卒) 平成 22 年 08 月 16 日	今田 久敏 (S. 39 卒) 平成 21 年 03 月 21 日
青木 春生 (S. 34 卒) 平成 21 年 11 月	多田羅 勝二 (S. 40 卒) 平成 17 年 05 月 01 日
田中 彰 (S. 34 卒) 平成 23 年 06 月 02 日	松田 祐邦 (S. 40 卒) 平成 22 年 12 月 12 日
飯田 文子 (S. 35 卒) 平成 21 年 03 月	金谷 優 (S. 41 卒) 年月日不明
井上 功 (S. 35 卒) 平成 20 年 06 月	柴崎 晴之 (S. 58 卒) 平成 20 年 05 月 30 日

### 平成 24 年度 武蔵工業会 定期総会のお知らせ

- \* 日 時：平成 24 年 6 月 16 日(土) 14 時
- \* 場 所：渋谷エクセルホテル東急(渋谷駅直結)
- \* 参加費：男性 7,000 円、女性 2,000 円、平成 22 ~ 24 年度卒業生は 1,000 円

詳細は 4 月 21 日以降の武蔵工業会のホームページをご参照ください。  
恩師を囲んで集まりましょう。



### 今井 章久 先生への記念品贈呈についてお願い

巻頭の会長の“ご挨拶”ならびに今号の“ご退職記念特集”記事でも記述されておりますが、昨年 3 月末で今井先生が永年教鞭をとられた母校を定年退職されました。つきましては次の要領で、先生に贈呈します記念品代を募金します。  
先生のご功績にお応えするため、皆様のご賛同をお願いいたします。

#### 募集要領

1. 金額：1 口 3 千円(原則として 2 口以上お願いします)
2. 期限：平成 24 年 6 月末日
3. 方法：同封振替用紙で期日までにお振込をお願いします。

### 会費(20年・終身)納入のお願い

本年度の終身会費は 1991、1992 年(平成 3、4 年)卒業の方が対象となります。対象の方は本号に同封の振替用紙により、平成 24 年 6 月末日までに終身会費(1 万円)をご送金頂きたくお願い致します。  
また、卒業時に納入する 20 年会費(5 千円)ならびに、過去の終身会費納入対象の方、すなわち、『1990 年(平成 2 年)以前に卒業された方で未納入の方』も対象となります。これらの方々にも振替用紙を同封しますので、至急お振り込みをお願いいたします。  
既にお振り込み済の方に振替用紙をお送りした場合は、事務的な手違いですので、何卒ご容赦下さい。

今後、会費未納の方には FLUX の送付を中止させていただきます。本年は是非納入されるようお願いいたします。

武蔵工業会のホームページがリニューアルされ、この中に通友会のページがありますのでそちらもご覧ください。



### 編集後記

今回は、今井章久先生のご退職記念号でした。先生の教えをいただいた沢山の皆様から寄せられた思い出の文章を拝読させていただき、今井先生のお人柄とともに先生に実験指導をいただいていた私自身の学生時代にも思いを馳せてしまい、ついつい仕事を忘れてしまいました。それにつけても前号の増澤信義先生ご退職記念号につづき、武蔵工大・通信科を代表する名物先生のご退職記念号の編集作業には寂しさを隠せません。近い将来、通友会会員のどなたかが都市大の学生諸君に武蔵工大・通信科の DNA を伝承するために情報ネットワーク工学科か生体医工学科の先生として着任される記事を掲載したいと願っております。(竹内 S.54 院 56)